［印象記］

第18回新潟医療福祉学会学術集会の一般口演を聴いて

新潟医療福祉大学　医療技術学部　視機能科学科
助手　生方　北斗

2018年10月27日に新潟医療福祉大学で開催された第18回新潟医療福祉学会学術集会に参加しました。今回は「世界に輝く日本の科学力・技術力」というテーマで開催され、演題数が学会始まって以来最多であったと聞き、学術集会に対する注目が一層高まっている印象を受けました。一般口演では、専門領域の異なるバラエティに富んだ発表と活発な討議が行われました。

大屋愛里先生（看護学科）による「Sense of Coherenceと看護実践への知識活用における自信との関連」では精神科病院に勤務する881名の正看護師を対象に、Sense of Coherence（SOC）と学習で得た知識を看護現場での実践に活用する自信との関連についての調査が報告されました。今回の結果として、SOCが高い精神科看護師は学習した内容を臨床現場で活用する自信を持ちやすいということでした。特に日々の営みにやり甲斐や生きる意味を感じる感覚を示す“有意味感”が高い者は学習を看護実践に活かす自信を持っていると述べられていたことが印象に残りました。私が従事する視能訓練士教育の中でも、日々の学習を学外施設での実習でうまく実践できた学生とそうでない学生がいることを経験します。そういった場面でこの“有意味感”は臨床現場での学びに左右する重要な指標となり得るのだろうと感じ、大変興味深い内容でした。

大徳尚司先生（診療放射線学科）よる「若年者の喫煙が血圧の末梢血管に及ぼす影響」は、若年者を対象とした末梢血管（網膜中心動脈）の血流を超音波ドプラ法で計測し、各パラメータを喫煙者と非喫煙者とで比較した報告でした。若年者の喫煙は血管収縮期に関与していると考えられ、末梢血管において喫煙による影響が示唆されたと述べられていました。また発表の冒頭はマヤ文明の時代から喫煙の習慣があったことや、3000年以上前の古代エジプト時代に作られた人のミイラのCT画像から、動脈硬化によって引き起こされた心筋梗塞を認めたという導入となっていました。会場内には初めて学会を経験する学生の参加者も多く、多分野の発表が行われている中で張りつめていた緊張が少しほぐれた表情をしていたのが印象的でした。

写真１．一般口演中の会場の様子

写真２．座長の吉岡豊 先生（右）と増田修 先生（左）